

## 駅のホーム 見守りの態勢を強めて

写真は中日新聞 1 月 15 日朝刊。「盲導犬の男性転落、死亡」とある。表題の中日新聞 1 月 17 日社説リードから一目の不自  
由な人が、またも「欄干のない橋」の犠牲になった。駅のホ  
ームから足を踏み外し、電車にはねられた。鉄道会社はホ  
ームドアの設置はもちろん、駅員らの見守り態勢の強化を急ぐべきだ。



今度の悲劇は 14 日朝、埼玉県の JR 京浜東北線蕨駅で起きた。盲導犬を連れた全盲の  
マッサージ師の男性が線路に落ちた。点字ブロックより線路側を歩いていた。犬はホ  
ームに残っていた。昨年 8 月にも、東京メトロ銀座線青山 1 丁目駅で、盲導犬を伴った男  
性がホームから転落して亡くなっている。まず気がかりなのは、視覚障害者と盲導犬に  
責任を転嫁するような声が聞かれることだ。「盲導犬はきちんと訓練されているのか」  
「視覚障害者は盲導犬を使いこなしているのか」という具合である。心配のあまり抱く  
素朴な疑問なのかもしれない。ただ、そうした発想は、健常者向けに設計された社会の  
責任を棚に上げて、障害者を締め出す風潮を強めかねない。真に問われるべきは、なぜ  
盲導犬に頼らなくては暮らせないのかである。障害の有無にかかわらず、誰もが平等に  
生きることができる社会への再設計が求められている時代だ。そのことを自覚したい。

国土交通省によれば、視覚障害者がホームから転落したり、列車と接触したりした事  
故は、2015 年度までの 6 年間で計 481 件に上った。防げなかった責任は、鉄道会社  
にあるだろう。目の不自由な人の安全を守るには、ホームドアが効果的だ。けれども、約  
9500 ある全国の駅のうち、15 年度末までに設置されたのは 665 にすぎない。鉄道会社  
には、財政面や技術面で乗り越えるべきハードルがあることも分からなくはない。JR  
東日本によれば、蕨駅をふくめて京浜東北線の駅では、ホームドアの設置はこれからと  
いう。しかし、これ以上、犠牲者を出してはならない。ホームドアの設置を最優先課題  
に位置づけて、前倒しで進める。それと併せて、駅員らの誘導や介助を徹底する。そう  
した気概がほしい。目の不自由な人を駅構内で見かけたり、監視カメラで気づいたりし  
たら、迷わず声をかける。平日と週末、また時間帯を問わず、責任者を決めて、機動的  
に見守ることができる態勢を整えたい。

駅の利用客にも、遠慮なく協力を仰いでいい。安全対策を通じて、  
障害を理解する好機になる。下の写真は毎日新聞 18 日朝刊。白杖  
シグナルは「助けて」と。乗車介助のイメージなどをもとに、機会  
があれば、まずは「ためらうことなく声をかけて」みよう。



(2017 年 1 月 24 日)